

海という名の本屋が消えた (99)

平野義昌

元町駅周辺(5) 学校その5

明治の「神戸小学校」前身4分校——神東小、上田小、神西小、花隈小——の話に戻る。1872(明治5)年、学制発布。神戸町に小学校4校(一番組小=神東小、二番組小=神西小、三番組小=花隈小、上田小)ができた。82(明治15)年に神戸小が完成して、各校は分校・分教場になり、やがて閉鎖。元町通の「神東小」と「神西小」から多くの学校が誕生した。

花隈小と上田小のこと。73(明治6)年、「三番組小学校」が花隈の福德寺本堂を借用して開校。翌年下山手通6丁目三番組戸長役場に移転して「花隈小学校」と改称。96(明治29)年閉鎖した。同じく73年、宇治野町上田の徳照寺本堂に「上田小学校」開校。79(明治12)年楠町8丁目に移転。93(明治26)年、神戸小から分離して「宇治野小学校」となるが、1906(明治39)年廃校。同年同地に私立「立志小学校」開校。12(明治45)年廃校。1896年に夜学校が創立し、「私立宇治野夜学校」「私立清風夜学校」と改称。1913(大正2)年「神戸市立清風夜学校」となる。元町周辺の学校誕生を辿る。

1873(明治6)年、「一番組小学校」が元町通3丁目の善照寺に開校。翌年一番組戸長役場(同3丁目、古美術商・太田氏敷地)に移転し、「神東小学校」と改称。同所に「兵庫県師範伝習所」も設立された。小学校教員とその志望者に「教授法」を教える。18歳以上50歳以下、修業年限6ヵ月、定員50名、筆頭教員2名。学科は読物・書取・作文・算術・習字。このとき伝習生は神戸区・兵庫区から各2名のみ、区から伝習生に賦与金があった(補註1)。教育実習は「神東小」で行われた。76(明治9)年、「伝習所」は北長狭4丁目関戸由義所有地(現在のJR元町駅北側、鯉川筋の西側)に移転。77(明治10)年、「神戸師範学校」に改称し、下山手通5丁目(現在兵庫県庁)に移転。当時の豊岡県(兵庫県北部・中部、現在の但馬・丹波地方と京都府丹後地方の一部)・飾磨県(兵庫県西部、現在の播磨地方)の師範学校と統合した。西南の役による財政難、経費節減の影響だ。78(明治11)年、「附属小学校」開校(補註2)。99(明治32)年、師範学校・附属小は武庫郡御影町(現東灘区)に移転、翌年「兵庫県第一師範学校」、さらに翌年「兵庫県御影師範学校」と改称。「神戸大学発達科学部」初期の姿である。

1901(明治34)年、「神戸師範学校」跡地に「兵庫県高等女学校」(戦後学制改革により県立神戸第一女子高等学校、のち公立高校再編で県立神戸高等学校)が開校した。

73年「二番組小学校」は間人(はしうど)市郎左衛門の塾に開校。翌年二番組戸長役場(元町4丁目)に移転して「神西小学校」。変則科を設け14歳以上の生徒を受け入れた。84(明治17)年、栄町通4丁目の醤油醸造業・高濱治右衛門宅を借用して分教場を開く(2年ほどで廃止)。89(明治22)年、校内(当時第三分教場、のち元四分教場)に「神戸夜学校」が設置される。修業2年6ヵ月、勤労青年に英語・簿記・読書・作文他、職場で役立つ学科を教えた。だが、98(明治31)年廃校となり、「神戸商業補習学校」に引き継がれる。一旦元三分教場(神東小)に移転し、1903(明治36)年に戻る。07(明治40)年に新校舎が完成し、昼は「私立神港商業学校」が開校し使用。同校は10(明治43)年神戸市に移管、16(大正5)年兵庫区に移り「第一神港商業学校」と改称する。17(大正6)年、鈴木商店店主・鈴木よねの寄付により跡地に「神戸

市立女子商業学校」が開校。23(大正12)年楠町に移転。戦後「市立湊川商業高等学校」。その後両校は統合、「市立神港高等学校」となる。さらに2016(平成28)年「市立兵庫商業高等学校」と統合し、「市立神港橋高等学校」。

1925(大正14)年、元町の店主たちが資金を出し合い、同4丁目内に「神港中学校」を設立。34(昭和9)年山本通(神戸女学院跡)に移転、現在の「神港学園高等学校」である。

さて、夜間「神戸商業補習学校」は1920(大正9)年「実業補習学校」、22(大正11)年「神戸商工実習学校」と改称、勤労青年のための実業教育学校であるが、36(昭和10)年「青年訓練所」(青年男子に初等教育の補習と軍事教育)と併合。「神戸市立商業青年学校」に改組される。勤労青年徴兵準備である。

1887(明治20)年、元町3丁目「善照寺」に浄土真宗婦人会の協力で「私立親和女学校」(現在親和中学校・親和女子高等学校)が開校。91(明治24)年一時廃校になるが、同校教師・友國晴子が再建。96(明治29)年下山手通7丁目に移転、1989(平成元)年灘区に移った。

1877(明治10)年、兵庫県令・森岡昌純は貿易港神戸での商業教育の必要性を唱えた。文部省に商業学校設立を上申し、補助金交付を求めたが認められず。慶應義塾出身の勸業課長・牛場卓三に創設計画を命じ、彼を通じて福沢諭吉の賛同を得た。慶應から教師派遣など支援を受け、県が校費を出した。78(明治11)1月、北長狭通4丁目関戸所有地を無償で借り受け、「神戸商業講習所」が開校した(図)。14歳以上、修業2年、経済、商学、地理、算術、習字、貿易、簿記などを教授。学費は県内生徒無料、県外生徒50銭。生徒19名が集まった。いずれも20歳前後。同年3月夜間部、7月兵庫に分教場(1年で閉鎖)を開設。生徒数は20~30名、夜間部30名前後になった。79(明治12)年、元町通3丁目の「神戸英語学校」(後述)校舎に移転。83(明治16)年下山手通4丁目に移転。84(明治17)年末で生徒数は昼39名、夜37名だった。当初県と市、貿易五厘金(補註3)から補助金を得たが、80(明治13)年以降は貿易五厘金のみになる。その後、農商務省の交付金を受けたものの、85(明治18)年廃止。学校存亡の危機になるところ地方税が支出され、86(明治19)年「兵庫県立神戸商業学校」に改編、生徒数128名。その後、橋通、楠町、西灘村と移転。1928(昭和3)年、校名を「県立神戸第一商業学校」に改称。翌年明石郡垂水町(現神戸市垂水区)に移る。「県立星陵高等学校」「県立神戸商業高等学校」の前身である。

1882(明治15)年、同講習所は二つの語学学校を併合している。78年、武井正平(のち神戸区長)が港都にふさわしい英語学校設立を県に請願。翌年元町通3丁目に「神戸英語学校」が開設された。修業3年、科目は英語学、習字作文、変則英語。81(明治14)年で生徒80名。80(明治13)年、同校校舎に「神戸支那語学校」が興亜会(補註4)有志により開設された。同会と貿易五厘金により運営。生徒数・校則など実情は不明。

女学校では、1875(明治8)年「女学校」(のち「神戸英和女学校」「神戸女学院」、本稿33号・87号で紹介済み)が開校。87(明治20)年、元町通4丁目に旧三田藩主・丸亀隆義と関戸が「神戸女子手芸学校」を創立。裁縫・編物・算術・英語を教えた。廃校年など詳細不明。92(明治25)年、山本通にイギリス国教会の支援によって「松蔭女学校」が開校(現在の「松蔭女子中学校・高等学校」)。翌年中山手通6丁目に移転。1929

(昭和4)年、灘区に新校舎完成。09(明治41)年同じく中山手通6丁目に「家政女学校」(現在の「神戸常磐女子高等学校」)が開校している。

資料では、1884(明治17)年元町通2丁目「摂善家塾」(独・英語)、同年北長狭通2丁目「英語・数学教授所」、85(明治18)年元町5丁目「神戸獨英学校」など語学学校の名がある。また、

76(明治9)年中山手3丁目「乾行義塾」(英・漢・数)、1902(明治35)年下山手通7丁目「高等裁縫女学校」、03(明治36)年花隈町「神戸英学校」他、受験予備校、裁縫学校、習字学校などの校名が並ぶ。いずれも明治末から大正初めまでに廃校になった。

旧花隈村の庄屋・村上五郎兵衛(日本画家・村上華岳の養父)が小学校開設当時の思いを書いている。

〈……今日の整備を観るに至れるもの、元より一朝一夕の事業にあらず、明治の初め神東、神西、花隈、上田の四小学校開設以来の状況を追想するに、当事者経営の苦心、有志者賛同の意気、将又当路者の熱心なる指導、誘掖、真に吾人後進をして敬慕感謝の念に堪えむらしむるものあり。(後略)〉註

村上だけではなく、神戸だけではなく、旧庄屋、地主、商店主らが学校設立と維持管理の他、金銭・土地提供、教科書のための書店、郵便事業などに多大な協力をした。明治近代国家の社会資本整備に貢献した。

註 神戸小学校開校三十年記念祝典会編・発行「神戸区教育沿革史」(1915年)(復刻版「日本教育史文献集成神戸区教育沿革史」第一書房、1982年)

図・参考文献 兵庫県立第一神戸商業学校編・発行『六十年史』1955年

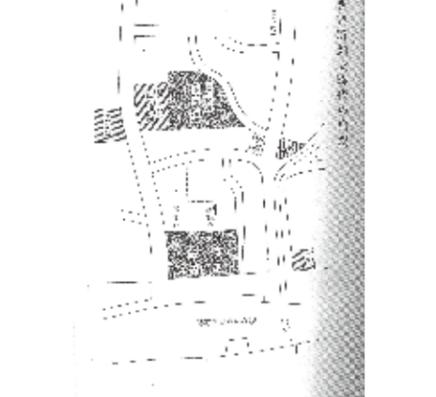
補註1 その後、学校規則は授業法の伝習から普通学科の教員養成を目的にした。入学年齢、修業年、定員、教育課題など改正、改訂が進む。

補註2 1878(明治11)年「附属中学校」も設立。廃校・開校を繰り返し、結局83(明治16)年廃校。県議会が中等教育不必要と、経費支出を認めず。

補註3 開港後、半官半民「貿易会社」設立。関税とは別に輸出入額の0.5%(五厘)を徴収、積み立てた。港湾・道路整備、警察など公共・土木事業の財源とした。1886(明治19)年廃止。18年間で40万円徴収。小学校、病院にも支出、貸し出しされた。(小原啓司「明治期の神戸における市街地整備手法の成立に至る考察」[土木史研究第18号1998年])

http://library.jsce.or.jp/jsce/open/00044/1998/18-0081.pdf

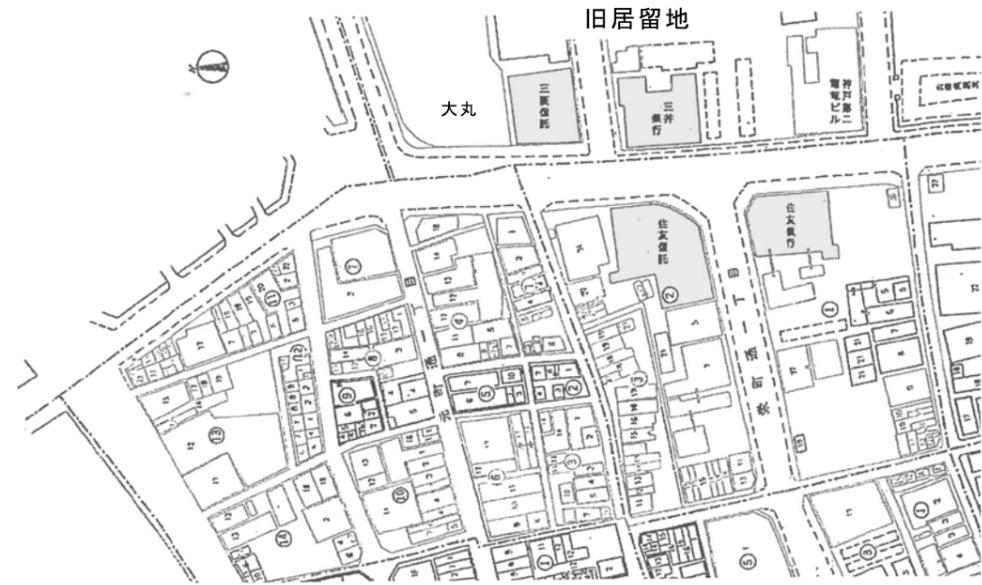
補註4 1880(明治13)成立、日清両国の提携振興を目指す団体。貿易港都市で支部を結成し、語学学校設立。引用文は新字・新かなに改めた。前号で太平洋戦争開戦日を誤記。「12月8日」に訂正し、お詫びします。



みなとMOIOMACHIケンチクさんぽ vol.7

公益社団法人 日本建築家協会 近畿支部

兵庫地域会 地域まちづくり委員会



震災前の旧居留地の店舗



1980年代の元町ゲート



南京町 第1期改造

入居して知らされたのは、町内会ごとに一丁目でくられた組織がある事で会費は店子でも月額200円という事でした。会長は兼田朋一氏で、この組織が震災後、栄町通りの歩道の拡幅、無電柱化等、栄町通のビジネス街の整備の元となったといえます。

元町 50年の変遷

我々が仕事場を栄町1丁目の住友信託銀行の6階に持ったのは、1972年で、50前になります。その時の栄町1丁目の四つ角は、すべて銀行で固められていました。入居して数年間は夏の季節になると、磯の香りがして、港が近い事を感じさせました。また大雨が降ると道路中央のマンホールの蓋が1M程飛び上がり、水が吹き出す事がたびたびありました。当時はこの様にインフラは、未熟でしたが、しかし1995年の大震災の時には栄町通りは、日銀や市役所に通じている道路のため、インフラは完全でした。

事務所は、ビルの6階で東面に窓が有り、道路を隔てて東側は旧居留地でした。日曜日は人通りは無く、ゴーストタウンの様子でした。また、北側の南京町は道路幅も狭く、戦後、朝鮮戦争の時代の船員や進駐軍向けの外人バーの名残があり、電柱と電線がクモの巣のごとく張りめぐらされた町でした。

戦後の元町地区の賑わいは、大丸百貨店の店長、長沢氏の時代、1989年~1992年に居留地ビルの1階に有名ブランドの店舗が出店ラッシュしたことに始まります。これにより、旧居留地の活性化が始まり、にぎわいがよみがえりました。1995年の大震災で旧居留地の建物は19棟倒壊の被害を受けましたが、旧居留地には連絡協議会と云う組織が有り、「旧居留地復興計画」を作成しました。まちのトータルイメージとして、

まち全体が公園
まち全体がミュージアム
人間が主体
歩行者にやさしい町

のスローガンのもとに、旧居留地は大きなコリドールを持った大丸百貨店と共に、風格有る街なみを平成9年(1997年)までの2年間で造り上げ、バスによる北野異人館との観光ルートも整備されました。

南京町も神戸市の指導のもとに、道路は8M幅に広げられ、東入口に長安門が建

ち、中華街と呼び名を変え、石畳の道路に南京ハゼの植栽が有る道路整備が行われました。また、震災後は1996年に、電柱地中化工事が行われ、新しく石畳が施工され、文字通り中華街と呼ばれる様子になりました。

元町商店街については、東の入口一番街から西の6丁目まで全蓋のアーケードが有りました。アーケードの入口には、1980年に建築家アントニン・レーモンド氏によるヨーロッパの城門を思わせる、アルキャスト(アルミ鋳物)で出来た、造形的にもすばらしいデザインのゲートがありました。しかし、2000年(平成12年)にミレニアム記念としてステンドグラスのゲートに変わりました。

この様に神戸市一番の商業密度をもつ商店街に形成されました。



稲地 一晃 (いなちかずあき)

計画工房 INACHI 代表／
一級建築士